「更級日記」荻の葉小考

実川恵子

「更級日記」は、孝標女の綴った四十余年の回想の自叙伝であるが、そこには極めて多層的な暗示を含ませた表現構造があるように思われる。それは、物語憧憬や夢、信仰、月影、風景描写などであり、それらが作品世界に織り込まれていくに従って作者の切々たる想いが露わになって読者に迫ってくる。

日記中、上洛後の次のような描写は、独特な気配や、唐突な印象を投げかける。

その十三日の夜、月いみじく隈なくあかきに、みな人も寝たる夜なかばかりに、縁に出でゐて姉なる人、空をつくづくと眺めて、「ただ今ゆくへなく飛び失せなばいかが思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て、ことごとにいひなして笑ひなどして聞けば、かたはらなる所に、さきおふ車とまりて「荻の葉、荻の葉」と呼ばすれど答へざなり。呼びわづらひて笛をいとをかしく吹きすまして過ぎぬなり。

笛のねのただ秋風と聞ゆるになど荻の葉のそよと答へぬ

といひたれば、げにとて、

荻の葉の答ふるまでも吹きよらでただに過ぎぬる笛のねぞうき

かやうに明くるまで眺めあかいて、夜あけてぞ皆人ねぬる

月の明るい晩、空を眺めて空想にふけっていたこの姉妹の会話は、姉の死という以後の日記の展開に予感めいたものを含ませる。また、深夜に男が女の門を叩いて、「荻の葉、荻の葉」と女の名を呼ぶが、答えない。男は女が寝入ったものと見、笛を吹き澄まして去って行く。そして、その情景に対する姉妹のそれぞれの想いが前掲した歌に託されてこの章段は閉じている。

この男が女を呼ぶ「荻の葉」は、隣家の女性の呼称を指すのであろうが、単なる女性の名というよりは、何らかの事情に基づいたある関係を示す名称のような印象を受ける。

ここに描かれた月の明かるい深夜に、姉妹が偶然垣間見た隣家の女性に男が訪問する場面は、作者が日記中で語る光源氏のようなすばらしい貴公子に愛され、山里に隠れ住み、四季の変化の中で心を慰めながら過ごす「あらまし事」の一情景とも重なり合うものと思われる。また、作者の生涯の中で、大きな喪失感を味わった「姉

の死」の暗示の叙述は、以後の作者の生涯に大きな影を落して行くことになる。また、男の訪れは男女の詳細な対応はなく、男は笛を吹き澄まし、この場から去って行く。そうした意味で、隣家の女性「荻の葉」への男の訪れは、「更級日記」の一つの主題といえる「悔恨」の発露を、意図的に描き出した章段とも考えられないだろうか。「荻の葉」という呼称に何となく異和感を覚えるのも、この観念的な描写の中に、作者のあることだわりが見えることに起因するからなのではないだろうか。

姉妹に投げかけられた男女の対応への問いは、二人の想いを唱歌歌に集約する形で、この「荻の葉」段を閉じるのである。

また、父の再びの任官後の年の冬、京に残された心細い作者の心境を語る次のような描写がある。

冬になりて、日ぐらし雨降りくらいたる夜、雲かへる風はげしう打吹きて、空晴れて月いみじうあかうなりて、軒近き荻のいみじく風に吹かれてくだけまどふが、いとあはれにて、

秋をいかに思ひ出づらむ冬深み嵐にまどふ荻の枯葉は

激しく吹きつける風に砕け迷う軒近くの荻の様相は、我身のあわれさと哀しみを一層強く想起させる。それは、この短い文中に、「はげしう」、「いみじく」、「いと」が繰り返され、作者の心象をより鮮烈に描写するようである。つまり、作者は月光があかあかと照りつける荒涼とした風景の中の荻の枯葉に、自らの姿を重ね、描き出すのである。

続いて、東国に下った父も任期を終え上京し、西山に移り住む。作者はこの風情ある西山の新居に心を慰められたが、人里から遠く離れ、訪れる人もなく、寂しさを味わったようである。この折の心境はこう語られる。

月のあかき夜などは、いとおもしろきを眺めあかしくらすに、知りたりし人、里遠くなりて音もせず。たよりにつけて、「何事かあらむ」と伝ふる人に驚きて、

思ひ出でて人こそとはね山里のまがきの荻に秋風はふく

この歌は、山里の垣根の荻に、我心境を重ね、侘しく、訪う人のない身の上にも、無沙汰を問う人のあることを詠う。

これらの「更級日記」上洛後の叙述中の「荻の葉」、「軒近き荻」、「まがきの荻」[1]は、孝標女の心象を一層際立たせる役割を荷ったともいえよう。物語への憧憬をかき立てるような女「荻の葉」、激しく風に砕けまどう哀しげな「荻の枯葉」、また訪れのない山里の「まがきの荻」、このいずれにもその情景を鮮明に写し出す冷たく、そして明るい月光が描写され、作者の心情の隈を際立たせていくのである。

作者の憧れ続けた「源氏物語」の夕顔や浮舟のように、山里に隠れ住み、貴公子の来訪をひたすら待ちわびる儚い身の上の悲劇的女性と、この「荻」はどこか類似性があるように思われる。

では、なぜ作者はこの「荻」に自らの想いを示したのだろうか。その背景を辿ってみたい。

「荻」という植物は、河や池などの湿地に群生し、縦横にはう地下茎を持つ。また、秋には黄褐色の大きな花穂をつけ、葉は幅広く、細長い線形で、風になびくと音を発するところから、ねざめ草、めざまし草との異名がある。和歌の歌材としての観点からその用例を捉えると、最も古い例は、「万葉集」巻十、作者未詳歌の、

葦辺なる荻の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る

が掲げられる。荻の葉ずれに秋を感じ、その折しも大空を渡る雁を情景的に詠じた歌であろう。この荻が風にそよぐことで秋を知るという把握のパターンは、「後撰集」の次の歌などにも見られる。

いとどしく物思ふやどの荻の葉に秋と告げつる風のわびしさ
（秋上・読人知らず）

秋風の吹くにつけても問はぬかな荻の葉ならば音はしてまし
（恋四・中務）

先の歌は、秋上巻に入集する歌だが、詞書は「おもふこと侍りける頃」とあり、悩みごとに沈む作者が、庭先の荻の葉を渡る秋風に切なさや心細さを覚えたものであり、繊細な感性を働かせた詠歌であろう。また次の中務詠は、「平かねきが、やうやう離れ方になりければつかはしける」という詞書を付し、遠のいていく男への恨みを、荻の葉を我身になぞらえて詠出している。このように、「荻の葉」と「秋風」の取り合わせは、前述の歌の他にも、

荻の葉を吹き出づる風ぞ秋きぬと人に知らるるはじめなりける
（『躬恒集』）

荻の葉ぞ風に乱るる音すなるもの思ふほどに秋やきぬらむ
（『山田集』）

荻の葉のすゑこす風の音よりぞ秋のふけゆくほどは知らるる
（『順集』）

などで明確な如く、極めて強固な関係を持つことが知られる。

また、同じ「後撰集」秋上、左大臣（実頼）詠の、

山里の物さびしさは荻の葉のなびくごとにぞ思ひやらるる

は、詞書を「秋、大輔が太秦のかたはらなる家に侍りけるに、荻の葉に文をさしてつかはしける」とし、実頼が、太秦の地にいる大輔の許に、荻の葉とともに贈った歌で、当歌の他にも二首の恋歌を有する。前述の歌のような、「秋風」の語は見えないが、「荻の葉のなびく」ことが秋風によるものという現象は明白である。このように、荻の葉ずれに秋を知るという類型的表現に、恋歌的情趣が添加され独特な歌境が詠出されるのが、「荻の葉」歌であろうか。

また、源道済の詠歌の、

いつしかと待ちしかひなく秋風にそよとばかりも荻の音せぬ
（『後拾遺集』・雑二）

や、『大和物語』一四八段の、

ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の荻ぞ答ふる

は、恋人からの音信を待つ想いを風に寄せ、その風にそよぐ荻の葉音の「そよ」（其よ）を相手の応答とする歌である。以後、この荻は、このような風と関連させて詠じられることが多くなり、「荻風」「荻の上風」「荻の葉風」などの歌語として詠まれることになったようである。

以上のように孝標女が、上洛後の内面的な心情を叙述する部分に描き出した「荻」は、前述したような、秋の訪れを告げる荻の葉ずれの音に、相手の応答を想起し、風になびく形が人を招き寄せるのに似るところから、中務や、実頼、道済らの歌に見い出せるような佗しく哀しげな恋情を含ませた和歌の伝統的な表現構造の中に、自身の「男不在」のやるせなさをオーバーラップさせ、独特な雰囲気で観念的ともいえる場面を描き出したのであろうか。

少女時代から憧れ続けた高貴な男性との邂逅をひたすら願望し、念じ続けた作者の想いは、成就されずに終わる。その悔恨は、こうした月に照らし出された儚き荻の葉の描写として、孝標女の一つの

心象的な風景としてとらえられたのであろう。

上洛後の荻の葉の一連の叙述は、物語耽溺の幻想世界から信仰に幸福を見い出そうとする現実世界に転ずる部分に位置し、そこに描かれたのは、作者自身の内面性の吐露であったと思われる。「荻」に託されたこの作者の想いは、自らが悟った「昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」とあるような、物語と歌に執着して、仏道修行をおこたったという悔恨は、伝統的和歌表現の日記介入[2]という型になって我が想いに「そよ」とも答えぬ哀しい運命の歌や、激しく吹きまどう哀しげな荻の枯葉に重ね合わされ、「更級日記」の内部に潜流していったのではなかろうか。

本文中の引用は新潮日本古典集成「更級日記」、「新編国歌大観」に拠るが、漢字等の表記は私に改めたものもある。

〔注〕

(1)「荻の葉」をめぐる論考に、鈴木佐内氏「更級日記『荻の葉』の発想」(「智山学報」第三一輯・昭和五七年三月)がある。

(2)「更級日記」中の和歌をめぐる論考は多数見られる。孝標女の歌の意味や位相を捉えた佐藤和喜氏「更級日記歌の位相」(「国語と国文学」昭和六十年四月)、小谷野純一氏『女流日記への視界』(笠間書院刊・平成三年六月刊)等参照。

文芸科賞(第十五回)について

文芸科賞は、課外の創作・評論活動におけるすぐれた成果を顕彰するために、応募作品中、優れた作品を提出した文芸科学生に贈られる。

平成五年一月三十一日締切の今回、応募作品は、小説五編、童話一編、計六編であったが、今回の特徴は、「嵐の中で」(小説)で応募した鈴川郁子を除いては全て一年生であったことで、文芸科教員全員による選考の結果、「今回は受賞作なし」と決定したが、翌年に期待を抱かせた。

選考結果は、平成五年十二月十五日の文芸学会席上において発表されたが、応募作品及び応募者名は次のとおりである。

(小説)「嵐の中で」　二年　鈴川　郁子
(小説)「ジッキー」　一年　青木千佳子
(小説)「禁断の森」　一年　岩田亜希子
(小説)「膿んだ傷」　一年　加藤　祐子
(小説)「素麺」　一年　北川　恵美
(童話)「魚の明り」　一年　鈴木　羊子

なお第十六回募集は平成六年一月締切で行われた。